た。二つの研究科にまたがって授業を履修したが、その時教わった一つ一つは、現在の私の研究活動を支える大きな土台となっている。またハワイ大学はアジア地域からの留学生を多く受け入れている。米国、英国などの英語圏で留学生に英語を教えるのではなく、非英語圏で英語を教えることを念頭に置いた研究内容が多くあり、「英語を教えるとはどういうことか」ということを常に考えさせられた。同じ東アジアの国といっても、日本と中国と韓国では英語教育へのアプローチが大きく異なる。韓国や中国からの留学生との議論を通して、どのようなアプローチが有効なのか、また、それぞれの国がどのようにバックアップしているのかなど、さまざまな点について目を向けることができた。特に、韓国の英語教育熱と英語教員の情熱には圧倒された。研究者としてはもちろん、教育者としても大きく成長させてくれた二年間であった。

クラスメートと一緒の写真（右から３人目が筆者）

フラ教室の仲間と（右から２人目が筆者）

ハワイでの二年間は、ハワイの文化に触れた二年間でもあった。ハワイは独自の文化を有している。せっかくハワイで過ごすのだからと、積極的にハワイの文化にも触れた。友人と一緒に地元のフラ教室に通い、クリスマスシーズンにアラモアナショッピングセンターでフラを踊ったりもした。またお正月にはハワイ出雲大社で巫女のボランティアもやった。そのような活動を通して、ハワイの地元の人々と親しくさせてもらった。

そして現在

ハワイから帰国して一〇年。手探りで行っていた当時の研究が、学校英文法の再構築というかたちで、一つの成果としてまとまりつつある。英語教育学を体系的に学び、英語学（認知言語学）と英語教育学の懸け橋となるような研究を行いたいと思いハワイへ飛び立ったが、帰国後一〇年を経てようやくかたちになりつつある。現在は、エンジニアを目指している学生たちに英語を教えているが、最近の学生はどうしても内向きの傾向がある。英語を教えることを通して、内向きな彼らと世界とをつなぐ懸け橋になれればと思いつつ、日々、教壇に立っている。

懸け橋となる研究を目指して

北九州市立大学基盤教育センター准教授
長 加奈子（ちょう かなこ）

皇太子奨学金奨学生（一九九九―二〇〇一年度）。文学修士（西南学院大学）。ハワイ大学大学院を経て、二〇〇二年西南学院大学大学院博士後期課程満期退学。福岡女学院大学短期大学部准教授を経て、二〇〇八年十月より現職。専門は、応用認知言語学、英語教育研究。

一九九九年七月、真っ青な空のもとオアフ島へ降り立った。それまで外国というと、冬の英国か近場の中国、韓国しか行ったことがなかった私にとって、ハワイの空と海の青さ、太陽のまぶしさには強烈なエネルギーを感じた。空港で出迎えてくれたハワイ日米協会のOkawa氏から歓迎のレイをかけてもらい、甘い花の香りにハワイに来たことを実感した。

分野と分野の狭間で

日本では、英語学を学んでいた。一九八〇年代後半から盛んになった認知言語学の枠組みに基づき、英語の意味構造を研究していた。認知言語学を深く学ぶにつれ、「認知言語学は英語教育に役に立つかもしれない」という漠然とした思いを持った。日本語と英語はさまざまな面で異なる特徴を有している。中学・高校・大学と日本で英語を学び、私自身、英語学習者としてさまざまな苦労を味わった。それは一人の英語学習者としての直感であった。しかし私は当時、英語学や英米文学を専門としている研究科に所属しており、英語教育を専門とする教授陣は周りにいなかった。留学をするのであれば、英語教育を専門的に学びたい、そして認知言語学を英語教育に採り入れる方法を探りたいと思っていた時、偶然、皇太子奨学金の募集要項を見かけた。ハワイ大学マノア校の英語教育研究は、世界でも指折りの教授陣を抱えており、世界トップクラスの教育プログラムを有している。しかも二年間じっくり腰を据えて学ぶことができる。私にとっては夢のようなチャンスだった。

●皇太子明仁親王奨学金（二〇〇八年二月に名称変更）は、現在の天皇陛下のご成婚とハワイご訪問を記念して、ハワイの日系人、ホノルル日本商工会議所、経団連を含めたわが国経済界の協力により、一九六〇年に創設された。日米両国の相互理解と友好親善の推進を目的に、ハワイ大学と日本の大学との相互留学を行っている。

ハワイでの学び

日本を発つ前、英語教育学を体系的にハワイ大学で学び、英語学（言語学）と英語教育学の懸け橋となるような研究を行いたいと思っていたが、ハワイ大学はその希望に十二分に応えてくれた。ハワイ大学では、英語教育や第二言語習得について専門的に研究する第二言語習得研究科（Department of Second Language Studies）に所属した。留学中の二年間は、所属した研究科の科目だけでなく、教育心理学研究科の科目もずいぶん履修した。研究に必要であれば、学部の垣根を越えて科目を履修できるところも、米国の大学院の大きな魅力であった。特に、統計手法を用いたリサーチに興味を持っていたため、統計分析手法についてさまざまなコースが提供されている教育心理学研究科の授業はありがたかっ